
Accel world ~ 果てなきセカイ ~

ザネクスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Acceler world 〈果てなきセカイ〉

【Nコード】

N8550Z

【作者名】

ザネクスト

【あらすじ】

何のとりえもない自称ゲーム中毒の「くにおけん国尾謙人」は高校入学の日、究極の対戦格闘ゲーム《ブレイン・バースト》を手に入れる。彼は自分自身と向き合い、強くなることができるのか？

プロローグ 始まりの夢（前書き）

この作品には一部、僕が t i z i n 氏の小説に投降したキ
ヤクターが登場しますが、あちらとの相違点も数多く存在します
のでご了承ください。

プロローグ 始まりの夢

一人の少年が倒れていた。

どこだかわからないところで、誰だかわからない、顔のない者たちが無言で彼を囲み、見下ろしている。

顔のない人間に、音のない空間。逃げ出そうとしても、体が動かない。

助けってくれと叫ぼうとした。声が出なかった。

ここはどこだと泣きさげぼうとした。けれど開いた口からは、いかなる音も発せられなかった。

通れている少年の上に、一羽の鷹が止まった。

鷹は静寂の中、その大きなくちばしを開けて問うた。

お前は、何を望む

少年はその乾いた唇を動かしていった。

こんなところは嫌だ、どこか遠くへ連れて行ってくれ

鷹は答えを聞くと、翼を広げて飛び去った。

後にはただ、顔のない者たちの作る静寂だけが残っていた。

プロローグ 始まりの夢（後書き）

どうもこんにちは。

アクセルワールドの二次創作を思い立って書き始めましたが、更新は遅いと思いますし、いつまで続くかわかりません。それでもどうぞよろしくお願いいたします。

始まって早々昨日の回想（前書き）

忙しいのに連載なんかやって、続けられるんでしょうか…

始まって早々昨日の回想

それは人生最悪の目覚めだった。

「うおおおおおおお！？」

先ほどまでベッドに横たわり、眠ったまま低いうめき声をあげていた国尾謙人はベッドからがばりと跳ね起きた。内容はよく思い出せないが、なにかとても嫌な夢を見ていた気がする。

窓から差し込む朝の陽ざしに照らされながら、ケントはベッドのわきに置いてあるはずのニューロリンカーを取ろうと手を伸ばしたが、その手は虚しく空をつかんだだけだった。どこにあるのだろうか、と疑問に思い、それが自らの首に装着されていることを知ると、ケントはよつやく、昨日のことを思い出した。

「ただいま、っと」

道路のあちこちに植えられている桜の木が一斉に花を開き、満開までのカウンタダウンをしている頃

、高校の入学式を終えたケントは自分の家に帰ってきていた。

さつさとゲームでもすつか、などと考えながら東京都新宿区にあるとある40階建てのマンションの36階の一室の扉を開いた後、いつもと変わらぬ我が家の玄関で靴を脱ぎ、そのままリビングへと行くと、あちこちに汚れが目立つ鞆を床に放り投げる。

「おかえり ケント、高校どーだった？」

リビングのソファに寝そべり、読んでいた雑誌から顔を上げて訪ねてきたのは、ケントの妹の国尾霧江だった。ケントのことは普通にしたの名前で呼ぶ。

「おいおい、この顔見てわかんねえのかよ。別に大したことなかったよ。ただ名前が中学から高校に変わったただけだ。」

今朝家を出たときは胸に淡い期待を抱いていたケントだったが、結局中学と同じようなところだ、というのが今日の入学式を通じて得た感想だった。

と、そこまで考えてから、ケントは一つのことを思い出した。

「あ、でもいいことは一個だけあったな、俺の後ろの席の倉崎さんて人がなかなか可愛くてさ」

「あーいーよそんなのどーでも。そーゆーの聞いてないし。」

「なっ、お、俺の楽しみをどうでもいいだとお!？」

がくりと膝をつき、うなだれる。兄の権威も落ちたものだと思うが、これでも昔に比べればまだマシだ。

半年ほど前まで、キリエとの仲はずいぶん悪かった。キリエはその頃まで、少女にふさわしい表現かは分からないが、いわゆる暴れん坊だった。学校ではクラスの男子に片っ端から喧嘩を吹っ掛け、叩きのめしていたそう。何度も担任の先生に家族の呼び出しをくらい、そのたびにロクに家にいない両親の代わりにケントがキリエの学校を訪れていたものだ。ケントが殴られた回数も一度や二度ではない。

だがそんなキリエの暴走は、半年前に突然終わりを告げる。彼女の周囲の人間も、初めはキリエの急な変化に戸惑ったものの、以前とは打って変わって明るく笑顔を浮かべる彼女の姿にみな感心し、追及するのをやめた。

しかし、ケントに対してだけはキリエは時々冷たい態度をとる。兄と接するときは昔の性格が出たりするのだろうか。

「そーだ、それよりさー、ケントってゲームよくやる？」

「いきなりなんだよ。というか、おれが重度のゲーム中毒者だったことぐれえ、お前も知ってたんだろ。」

突然の質問に戸惑いながらもケントは答えた。

「じゃーケントはゲーム得意？」

「？ま、まあ俺の今やってるアドベンチャー系のカクゲーん中じゃそこそこな立ち位置だとは思うが…それがどうしたんだよ？」

質問の意図が飲み込めないケントだったが、キリエが次に発した言葉で、混乱はさらに深まった。

「ならいいかな、それじゃーケント、今からあたしの部屋に来てくれない？」

ますます謎が深まるばかりの中、引きずられるようにしてやってきたキリエの部屋は、予想に反して意外に綺麗だった。ベッドと勉強机とその上に置かれた今時珍しいパソコン以外に目立って大きなものはなく、床にもクマのぬいぐるみなどがいくつか置いてあるだけのいたってシンプルな空間である。関係が改善されたとは言って

もその後も彼女の部屋に入ったことはなかったもので、どうせあいつのことだから散らかってんだろ、などと適当に考えていたのでケントにとっては驚きだった。

キリエは部屋にあるクッションをケントに差し出し、座るように言つと自分はクマのぬいぐるみを抱いてベッドの上に座った。

「で、俺をここに連れてきた理由は何なんだ？」

「うん、特に理由はないんだけどなんとなくこの方がいいかなって」

「いや、言ってる意味がさっぱり分からないんだが。」

「はあ、要は意味ねえってことかよ……」

クマのぬいぐるみをぼすぼすと殴るキリエにケントはあきれたように言った。キリエは何とも言えない含み笑いのようなものを浮かべて口を開く。

「いやー、あんた今日高校生になったわけでしょ？だから高校入学祝にプレゼントとしてあるゲームをあげよーと思ってさ。」

「入学祝？しかもゲーム？お前が？」

キリエの予想外なセリフに思わず顔をしかめて質問を連発した。キリエはそれほど熱心にゲームをやりはしないし、何よりこれまでキリエにプレゼントを渡された経験など皆無だったからだ。やはり今日のキリエはなんだか変だ。

「そー、ゲームよゲーム。ってことで、この直結ケーブルあんたの

「ニューロリンカーにさして。」

「まあいいが…ケーブルつないでコピーインストールできるゲームなんて今どきそうあったか？」

キリエがクローゼットの中から取り出したのは1メートルほどの長さの銀色に輝く一本のコードだった。直結ケーブルとはケントたちが首に装着している携帯端末同士を接続する有線コードである。これを付けている者同士は思考で会話ができ、セキュリティも非常に甘くなるので、よほど信頼し合っているなかでなければできない行為だ。しかしケントは相手が自分の妹であるため、特に考えることなく差し出されたケーブルを受け取った。どうせたいしたゲームでもないだろう、少しやってつまらなければそのまま放置しよう、などと思いながら自分の黒いニューロリンカーに直結ケーブルをさした。

ケントが接続したことを確認するとキリエは仮想デスクトップを操作し、表示されたであろうインストールボタンを押しこむようにしたが、不意にその手をピタリと止めた。ケントの脳内に、キリエの思考発声による言葉が響く。

『そーだ、その前に一つ聞かなきゃいけないことがあった。』

そう言ったとたん、キリエの雰囲気我突然がらりと変わった。ケントのほうに向きなると、先ほどまで打って変わって鋭い刺すような目つきでさらに不可解な言葉を発した。

『このゲームは普通のゲームじゃない。これをインストールすればあなたの全てが変わる。もう二度と、今までの日常には戻れないかもしれない。それでもこのゲームを受け入れる覚悟はある？』

「な、なんだよ、たかがゲームだろ」

いきなりのキリエの豹変ぶりに驚き戸惑ったせいで、思考発声で行える会話が口から出てしまった。おそらく彼女にはこの声が二重に響いていることだろう。

（なんだ？こいつのこの目、半年前と同じだ。なんで今さら・・・）

『ねえ、早く答えてよ。』

逃げ出したくなるほど冷たい視線がまっすぐにケントを射抜く。どうやらキリエの差し出してきたものは、軽々しく扱ってもよいものではないらしい。縮みあがりながらもケントは自分の日常とやらのことを考えた。何のとりえもなく、ただゲームしか好きなものがないケントはずっと、変わらない、無味乾燥な日々を送ってきた。心のどこかでは何か物足りないものを感じながら、しかし気がつけばゲームに向かう自分が、ずっと嫌いだっただ。しばらく考えていたケントはやがてキリエの目を見つめ返し、きつぱりと答えた。

『いいぜ、上等だ。くれてやるよ、俺の日常なんか。』

少しかっこつけすぎたか、と思いつつも吹っ切れたような気持ちでキリエとそのまま睨み合っていると、ようやくキリエはふあーっ、と長いため息をつき、いつもの表情に戻った。ケントも緊張が解け、ほっと胸をなでおろす。

『まーケントがそーゆーのは分かってたしあたしも同じことを《親》に言われた時イみわかんなかったんだけどねー』

半分諦めたような表情で言いながら、キリエがボタンを押すと、

ケントの前にインストールを許可するかというメッセージが現れる。迷わずOKを押すと、ロード画面がに移った。

今キリエの言った《親》って、インストール元の意味かな、などと相手もいいことに思考を巡らせているうちに30秒ほどかけてロードが完了すると、目の前いっぱい、燃えるような文字が浮かび上がった。

それを見たケントは戸惑ったようにつぶやいた。

『・・・ブレイン・・・バースト・・・？聞いたこともねえぞそんなゲーム。』

始まって早々昨日の回想（後書き）

気が付いたら年を越していました・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8550z/>

Accel world ~果てなきセカイ~

2012年1月1日01時00分発行